

二人の来訪者

このほど、はなの村の活動を耳になさった二人の方が村の活動見学にお見えになりました。藤本さんの案内で村内を見回り感想文が寄せられてきましたので紹介します。

心強い「はなの村」の存在

藤本様にご案内いただき、大変有意義な1日でした。

キノコ屋さんの「ゴミ」を買うと言う頓智のすばらしさ、その熱で笹と戦うとか、日本ミツバチの巣箱など、うれしいことです。ヨーロッパの園芸愛好家たちも自分の庭に植えた竹や笹で苦労しています。

自己紹介を少々。昭21年生まれ。小田原近くの郷里へもどった親が鶏、羊なども飼い、ヤギ乳を売り、落花生、玉葱、薩摩芋など供出させられ、配給モノを食べ、という時代、木登りが大好きな子供でした。

私立女子中学で苦勞し、やっと入った東京の音楽専門高校は、金銭的

にも心身にもきびしく、大学を出たとしても「女」に仕事などなく、男女平等、女も結婚が就職ではない、手に職を!という時代。病気で倒れる寸前、たまたま保証人が見つかったスイスへ19歳で留学。アルバイトして自立。23歳から30何年か「職人仕事」し、病氣して退職。幸い元氣になり、現在はチュリヒ近くの農業地帯で広い庭付きの小さい家を借り、おいしい日本野菜を作ったりして老後を楽しませていただいています。

しかし、外国人に対する風当たりはひどくなるばかりなので、何回も失敗しましたが、やはり「引き揚げ帰国」を計画しています。「花の村」のような所もあるというのは、大変心強いです。また、完全有機食品を探せば見つかるようになり、頼もしいです。そして、スイス並みにどこかのスーパーでも買えるようになる事を望みます。皆様の長いご活躍発展をお祈りしつつ感謝をこめて

遠藤たか子

「学園花の村を訪ねて」

僕が「学園花の村」を訪れることになったのは、とあるご縁が始まりました。京都大学を卒業した私は、学生生活の最後に、日本のことを知るため「東海道五十三次」を歩く旅に出ることを決意しました。「人」に注目し、様々な地域、そこに働き生きる人たちに触れる中で、自らが語る「日本」に具体的な「暮らし」を取り込みたいと考えたのでした。そんなとき、出発を控えた京都の地で柴桂子さんに出会い、掛川「倉馬の里」の藤本将さんをご紹介頂いたのです。

二月下旬、到着した私は、どこか懐かしい気分に浸っていました。想い起こしていたのは、オーストラリアのとあるエコビレッジにてパーマカルチャーのデザイナー家族と半自給自足の生活をした日々です。ここ日本でも、静かに佇む里山は、人間が本来持つはずの命の鼓動、金銭的な価値を超えた「豊かさ」に溢れていました。

経済成長という盲目的な目標が

置き去りにしている、「豊かさ」。二宮尊徳が強調した「道徳」が、それを構成する重要なものであるような気がします。藤本さんから託された言葉の端々に、目指す社会像のもとに「学園花の村」を創り上げる皆様の熱い想い、そして行動する勇気が表れていました。

これからは「想像力と創造力に溢れた社会を実現する」という夢に向かって、発展途上国の開発援助という舞台で働いて参ります。「倉馬の里」で見た景色を思い浮かべながら、未来の世界に想いを馳せて、誠実に仕事をしていきたいと考えております。

大河原誠也

過日。花の村を訪問したお二人のうち、女性は海外から安全な日本に帰国する方。

若い男性はJICAに内定し、これから海外に雄飛するという対照的なお二人でした。

(藤本記)